



## クリーン農業と農協販売事業

(社) 北海道地域農業研究所 所長 太田原 高昭

### 一、コープさっぽろ農業賞

昨年から生協協同組合コープさっぽろの会長を兼ねることになりいろいろと生協の仕事にも携わることになった。農業団体と消費者団体との橋渡しの役目ができればと念願している。生協の仕事として強く印象に残るのは「コープさっぽろ農業賞」の審査委員長を努めたことである。この賞は、コープさっぽろ初の試みで、おそらく消費者団体が農業者を表彰する制度は全国的にも初めてではないだろうか。

審査委員は、コープさっぽろの役員だけでなく、農業団体、道、札幌市、有識者などから就任していただ

いた。「消費者からみて好ましい生産者」を選ぶ農業賞には一〇〇件近くの応募をいただき、そのうちから書類選考で一〇件を選び、審査委員全員参加で三回に分けての現地調査を実施した。その結果、最高賞の知事賞には北見市の北原さん、同じくコープさっぽろ会長賞には新篠津村の大塚さんが選ばれた。他に特別賞に三件、奨励賞に四件の生産者、グループが選出された。

農業賞の他に、農業との交流をテーマにした作文、写真、絵画を対象とした「交流賞」もあり、こちらには五〇〇件以上の多数の応募があった。学校ぐるみで取り組んで下さったところもあり、子供たちの作品が

多かったが、離農して都会に住むお年寄りが村での思い出を描き込んだすばらしい絵もあり、これらの作品は札幌市長賞として表彰された。

表彰式は十一月十六日に札幌のパークホテルにおいて華やかに開催され、高橋はるみ知事にも列席していただいた。新聞やテレビでも大きく報道され、とくに日本農業新聞ではかなりのスペースを割いて取り上げて下さったので、東京方面に出かけても「コープさっぽろはいいことをしてくれたね」とこちらがおおいに誉められることになった。消費者はこういう農業者を望んでいるというメッセージ性が理解されたのだと思う。

## 一、意欲的農業者の農協ばなれ

というわけでコープさっぽろ農業賞は順調にスタートし、これからも生協の大切な行事として育てていきたいと考えているが、個人的にはそれ以来ずっと心に引っ掛かっていることがある。

それは受賞者の多くが特別のルートで販売している「農協ばなれ」の生産者だったことである。北原さん

は四〇年間生協とタマネギの産直を行っているし、大塚さんも米は農協出荷だが、野菜はすべて直売である。

特別賞に選ばれた十勝清水のクリーン大豆生産組合と、余市町のりんごクリーン栽培組合以外は、おそらく日本農業賞やホクレン夢大賞など農協が主催する賞では書類選考で落とされているのではないか。意識的にそういう人を選んだわけではなく、消費者が望む生産者となるとどうしても有機・無農薬栽培的な取り組みが評価されることになり、そういう人は現状では農協共販に乗りにくいから、結果としてこうなるのである。

これまでの農協共販は、化学肥料と農薬に依存した大量生産で卸売市場に出荷するものであり、ロットが大きいほど有利販売ができるとされてきた。したがって減農薬や有機肥料などに取り組む人が共販から外れるとその分だけロットが小さくなり、仲間に迷惑をかけるとして異端者扱いされてきた。消費者の「安全・安心」の願いに答えようとする意欲的な農業者ほど

「農協ばなれ」することになるのである。そういう人が少数者でいるうちはまだよいが、農産

物流通における卸売市場の比重はこのところ下がり続けており、市場出荷一本やりでは組合員の所得を確保できなくなってきた。消費者のニーズも価格と品質に二極化してきており、安い価格を求める層は、安ければ輸入品で結構というようになってきている。これからは農協自身が売り方を工夫し、多角的な販売が出来なければ、異端者の数はますます増えることになる。

### 三、「一国二制度」による再結集

昨年急逝した宇都宮大学の宇佐美繁教授はこのことを早くから警告して、農協販売事業の「一国二制度化」を提言していた。これまでの市場出荷に加えて、異端者と「歴史的和解」をして農協自身が新しいノウハウを学んでいくのである。ちょうど中国がこれまでの制度を保ちながら、香港を取り戻して一国二制度を並行させていく柔軟な対応をとったことに引き寄せた絶妙な表現だと思う。

すでに府県の先進的な農協はこの段階に達している。私はつい先ごろ「家の光文化賞」の現地調査で訪れた

岩手県のJAいわて中央でその実例を見せていただいた。ちょうど主作物のひとつであるりんごの選別が行われていたが、このりんごは全量が減農薬の特別栽培で、その技術はかつての「異端者」から学んでいる。そして一度選別したものをさらに糖度計にかけ、千個に数個というたつぷりと密が入った高級品を選び出している。これが贈答用として高く売れるため、個人販売していた人も共販に戻ったという。

この農協では特別米にも力を入れ、コープさっぽろの共同購入商品などいくつかの特約先を持っている。野菜類も全国の生協や量販店と産直関係を結んでいて、今では市場出荷は三分の一に縮小し、三分の二をそれより価格的に有利な特約で売っている。まさに一国二制度で、今では旧制度（市場）より新制度（直売）が量的にも価格的にも上回っており、この実績が一度農協から離れた組合員を呼び戻すことになったのである。

「消費者の望む生産者」が農協共販の主役となり、JAブランドこそ安全・安心の保証だと信じられる時代を、農業団体と消費者団体とが協力して築いていきたいものである。